

台湾 鹿港と北港における寺廟と都市空間の関係性について

Keywords

台湾 鹿港 北港
寺廟 朝天宮 市区改正

1. 研究背景と目的

廟とは中国起源の神様を祀るための宗教建築であり、かつ地域のコミュニティの場としても活用されており、台湾の人々にとって寺廟は生活の一部のような存在となっている。そのため廟は古くから地域の民間人の共同出資によって建設され、現在台湾に存在する廟の数は9000箇所以上とも言われている。

本研究では台湾（中華民国）の中部にある鹿港と南部にある北港という二つの都市を対象とし、寺廟とまちづくりの関係性について考察することを目的とする。

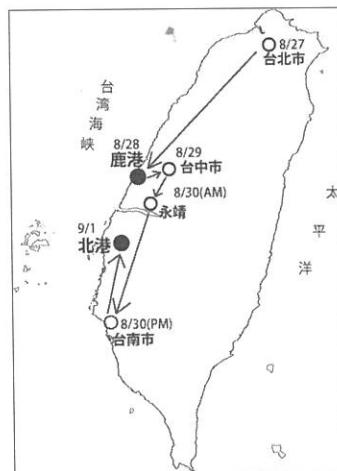


図1 台湾調査 スケジュール(2012/8/27~9/1)

2. 研究方法

2.1 実地調査

- (1)実測による寺廟の図面作成
- (2)廟での参詣客の様子の観察
- (3)廟周辺の建物の用途調査

2.2 実地調査日・調査対象地について

- (1)実地調査日：鹿港(2012年8月28日)

北港(2012年9月1日)

- (2)調査対象地

鹿港：天后宮、敕建天后宮（新祖宮）、城隍廟、三山國王廟、
興安宮、文武廟、鳳山寺、地藏王廟、龍山寺

K09008 伊東 佳余子



図2 鹿港 地図

北港：朝天宮、代天宮、鎮安宮、昭烈宮、義民廟



図3 北港 地図

2.3 文献調査

- (1)古地図、古写真の収集
- (2)先行研究を含む文献収集
- (3)(1)と(2)による都市形成過程の分析

3. 鹿港

3.1 概要

鹿港は元々平埔族と呼ばれる台湾原住民の居住地であり、明末にはすでに漢人が来て開墾したと言われている。

乾隆 49年(1784年)に港が開港し、鹿港から大陸へ航行することが許可された。清朝の時代、鹿港は“一府二鹿三艋舺”と呼ばれ、台湾において最も栄えた町の一つになった。（一府は台南府、二鹿は鹿港、そして三艋舺は台北の萬

華。）

しかし、土砂の堆積によって港湾は次第に遠浅となり、現在は港としての機能がうすれてしまった。

1933年日本統治による市区改正で中山路が拡幅整備され、現在は中山路が鹿港のメインストリートとなっている。

3.2 鹿港の寺廟と歴史の関係

表1から廟の移転が鹿港の歴史と関係していることがわかる。

龍山寺は1661年に現在の鹿港第一市場北側暗街仔巷内に建てられたが1784年に港が開港したことにより現在地に移転。三山國王廟は1737年に建立されるが日本統治による市区改正により現在地に移転する。城隍廟も1754年に建立されるが、市区改正による中山路の拡幅により廟前広場と門排亭が取り壊されて現在の造りになった。ただし天后宮は康熙22年(1683年)に湄州から媽祖の本尊が運ばれてきたことによる、天后宮の敷地拡大が移転の背景であると考えられる。

表1 鹿港の寺廟と歴史

永曆1年(1647年)	天后宮 建立
永曆15年(1661年)	龍山寺 建立
康熙23年(1684年)	興安宮 建立
雍正3年(1725年)	天后宮 現在地に移転
乾隆1-60年(1736-1795年)	地藏王廟 建立
乾隆2年(1737年)	三山國王廟 建立
乾隆19年(1754年)	城隍廟 建立
乾隆49年(1784年)	港が開港
乾隆51年(1786年)	龍山寺 現在地に移転
嘉慶16年(1811年)	文武廟 建立
道光2年(1822年)	鳳山寺 建立
明治28年(1895年)4月17日	日本統治 開始
昭和4年(1929年)	三山國王廟 移転
昭和8年(1933年)	鹿港 市区改正
昭和9年(1934年)	城隍廟 一部取り壊される
昭和20年(1945年)10月25日	日本統治 終了



図4 鹿港 寺廟 移転地図

4. 北港

4.1 概要

北港も鹿港同様、港町としてかつては栄えていたが、1803年の大洪水により、町の分断や港の埋没により港としての機能が果たせなくなり、北港は衰退した。

しかしこの町の朝天宮は台湾の媽祖信仰の総本山的役割を果たし、朝天宮を中心とした宗教都市として再生された。

毎年、旧暦1月15日から3月23日までの間は進香期と呼ばれ、台湾各地に分配された媽祖像が北港の朝天宮に里帰りする。その為、祭りの時になると数十万の人が北港に訪れている。

4.2 朝天宮

北港にある朝天宮は康熙33年(1694年)に樹壁（仏教の僧）が湄州媽祖の神像を持って渡来し、小さな祠に神像を奉じたのが始まりといわれている。

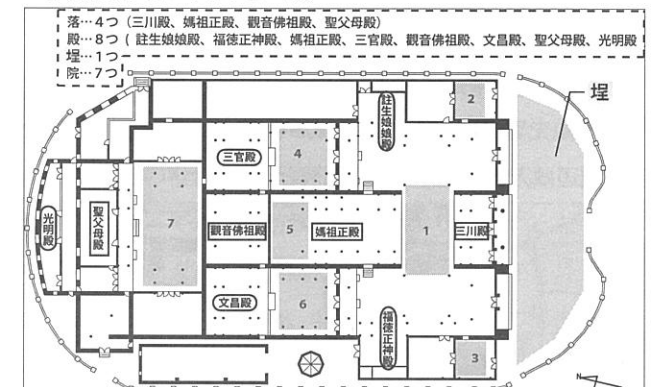


図5 朝天宮 平面図

朝天宮の造りは『四落八殿、一埕七院』（図5参照）である。本殿には媽祖が、その左右には千里眼と順風耳が祀られ、その周りにはおよそ30もの諸神が祀られている。

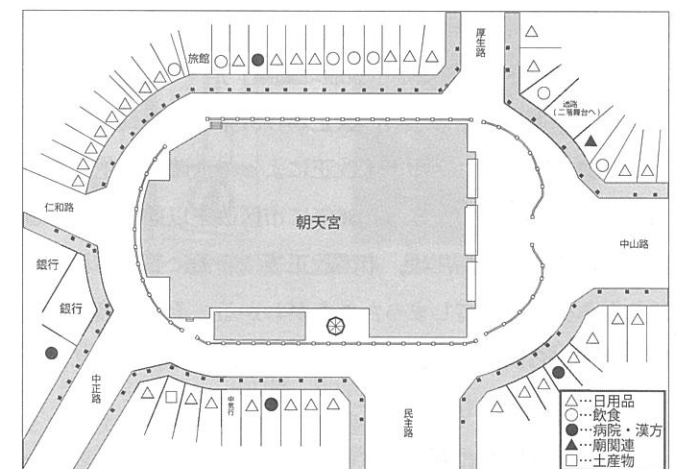


図6 朝天宮 周辺店舗(1970~80年代)

長円形の敷地の中に建物が収まっており、朝天宮を中心にロータリー交差点になっているのが特徴である。30年程前の朝天宮周辺の商店街には生活用品を売る店が建ち並んでいた

が現在は土産屋や供え物の店などの店が多いことから、地元の住民よりは観光客をターゲットにした商業店舗が多いことがわかった。

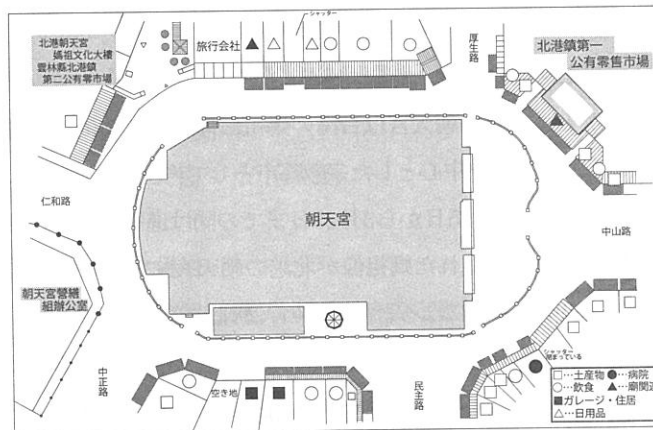


図7 朝天宮 周辺店舗(2012年)

4.2 鎮安宮と市区改正

北港にある鎮安宮は光緒12年(1886年)に建立した楊府七千歳を祀る廟であり、別名七王爺廟とも呼ばれている。北港に来る観光客や地域住民の多くが朝天宮で参拝をする為、鎮安宮周辺は人の気配がなく、閑散としていた。

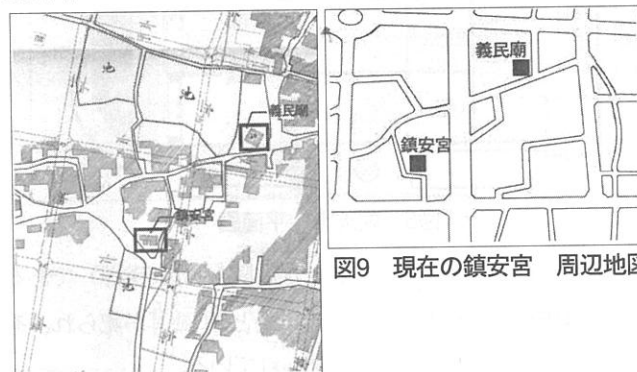


図9 現在の鎮安宮 周辺地図

図8 1913年 鎮安宮 周辺地図

(出典「日治時期 臺灣都市發展地圖集」)

北港は日本統治による市区改正が1937年に行われたため、図8と図9を比べることで市区改正によって道路が変化していることがわかる。鎮安宮は1886年に市区改正以前からある道路沿いに建てられたため、市区改正後に新たにつくられた大通りから少し離れてしまったことがわかる。そして義民廟も図8、図9から同様のことが考えられる。同じ市区改正によって朝天宮は廟そのものがロータリー交差点の中心になり、賑わいを見せている一方、鎮安宮や義民廟などの参詣客が明らかに少ないのは大通りから見つけにくい位置にあることが原因の一つであると考えられる。

5. 宗教

5.1 台湾で信仰される3大宗教

台湾で信仰される宗教は主に三つ存在する。一つ目は儒教である。儒教は中国最古の思想的理論であり、君子と称するものに理想の像を求め、自分以外の為にも善行を行う論理説である。孔子によって説かれたことから、孔子廟が儒教の寺廟に分類される。二つ目は仏教である。漢代以降にインドの僧侶によって中国に伝来し、中国仏教として成長した。仏教寺院の例として鹿港の龍山寺がある。三つ目は道教である。道教は台湾人に最も浸透している宗教であることから台湾では道教の神々を祀る廟が殆どである。その理由として道教の信仰心は民族の習慣や社会問題、勉強などの格差などの日常生活の中で生まれたからである。

	台北	宜蘭	桃園	新竹	台中	南投	嘉義	台南	高雄	台東	花蓮	澎湖	合計
寺廟	11	6	7	13	25	16	19	11	5	-	1	51	165
儒教	187	209	108	254	627	116	638	642	178	8	11	84	3062
道教	21	6	2	3	-	-	12	15	1	-	-	17	77
仏教	21	6	11	42	30	6	15	25	14	-	-	2	172
齋堂													
合計	240	227	128	312	682	138	684	701	198	8	12	154	3484

(1918年12月末現在 丸井 1919 の付録図表2より作成)

図10 1918年現在の地方ごとの各宗教廟数

(出典「台湾漢人社会における民間信仰の研究」古谷信平)

5.2 鹿港の各寺廟の分類分け

鹿港の各寺廟で祀られている諸神、建物の建築形式、神格の表は以下の通りになった。なお、ここでいう神様の格付けとは、道教における事実上最高神である天公(玉皇上帝)を中心と考えたものである。(図11参照)

表2 鹿港の各廟の分類分け

	奉祭神	建築形式	神格
天后宮	媽祖	三進二院	2
興安宮	媽祖	二進一院	2
城隍廟	城隍爺	二進一院	3
三山國王廟	山の神様	三進二院	3
文武廟	開聖帝君(武神) 文昌帝君(文神)	文祠、武廟共に 二進一院	3
鳳山寺	廣澤尊王	二進一院	3
地藏王廟	地藏様 「祀境主公」	二進一院	4
龍山寺	觀世音菩薩	四進三院	4

建築形式の『進』とは建物の数を、『院』とは吹き抜けの数のことを表す。

基本的には神格が高いと建築形式も派手になる。しかし、興安宮は神格が高いが、廟自体の大きさは比較的小さいく、龍山寺はランクが低いが「台湾紫禁城」の名を持つほど大規模で華麗な彫刻細工がされているなど、例外もある。

5.3 北港の各寺廟の分類分け

北港の各寺廟を鹿港の寺廟同様に分類分けし、表で表したものが以下の通りである。

表3 北港の各廟の分類分け

	奉祭神	建築形式	神格
朝天宮	媽祖 觀世音菩薩	四落八殿 一埕七院	2
義民廟	林節 土地公	三進一院	2
鎮安宮	楊府七千歳	單開間一進	2
代天宮	五府千歳	三進二院	2
昭烈宮	開漳聖王	單開間一進	3

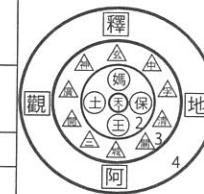


図11 神格の図

北港の廟で祀られている諸神の多くが高い神格であるが、朝天宮が台湾の中でも大きな媽祖廟であることから他の廟が朝天宮の勢力に負け、あまり増築されずに規模が小さいままであると考えられる。

6. まとめ

6.1 日本統治時代の鹿港のマスタープラン

鹿港の中山路はもともと雨風を防ぐためのひさしをつけた商店街が続く「不見天」(空が見えない)を形成していた。ひさしと言っても建物と建物の間に天蓋をのせただけのつくりであり、日本統治時代日本人はこのごみごみしたアーケードを不衛生に思い天蓋を全て外した。市区改正ではもともと不見天街が続いていた中山路を拡張し、中山路地を中心にグリッド状に道路を引くことでインフラを整える政策を打ち出した。



図12 20世紀初頭の鹿港地図 図13 鹿港 計画図(1935年)

6.2 鹿港における寺廟と都市空間の関係性とまとめ

天后宮や龍山寺、文武廟などの大きな寺廟は閑港廟(鹿港全城を寺廟領域とする寺廟)であることから、廟の配置や向きに沿った市区改正が行われたと考えられる。その一方で三

山國王廟や城隍廟などの比較的小さな廟はもともと道路造成地域に位置していたために、移転や一部取り壊しを余儀なくされた。しかし路地裏に面している興安宮や鳳山寺と比べてメインストリート沿いに面しているために参詣客は多かった。

「個々の住居よりもまず集団の廟を立派にしたい、廟が栄えることで個々が栄える」という台湾の人々の考えが古くからある。廟が栄え続けるには廟の参拝に訪れる人の多さやその寺廟領域に住む地元住民の協力が大切である。

6.3 日本統治時代の北港のマスタープランと朝天宮

朝天宮は康熙33年(1694年)に建立した古くからある媽祖を祀る廟である。その当時から朝天宮は北港を象徴する大きな存在だったが、日本統治期の頃には更に大きな盛り上がりを見せる。昭和16年(1941年)の調査によると北港朝天宮の信仰人口は150万人で、これは当時の台湾の人口の4分の1にあたる。その影響もあって、大正9年(1920年)にはロータリー整備が行われ、現在のような朝天宮を囲う道路配置になった。昭和12年(1937年)には中山路などが拡張整備された。中山路は嘉義などの南方の町から朝天宮へ続く参道になっており、この道路拡張によって北港を訪れる信者がより来やすくなった。この中山路と朝天宮の配置は日本の長野県善光寺と善光寺へ向かう参道とよく似ている。北港の朝天宮とその都市空間は日本の伝統的な門前町と重ね合わせてつくられたのではないだろうか。

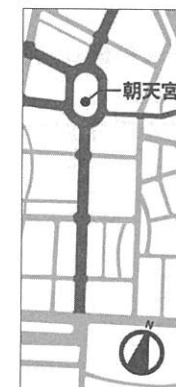


図14 朝天宮へ続く参道



図15 長野県善光寺の参道

参考文献

- 「中国人の街づくり」 郭中端・堀込憲二 相模書房 1980
- 「台湾の歴史散歩」 山口修 山川出版社 1991
- 「以古文書見證鹿港空間更迭」 國立臺北藝術大学 碩士學位論文 2007
- 「台湾 鹿港における近代都市空間の形成過程に関する考察」 2008 東京理科大学 大学院 工学研究科 建築学専攻 平出 由美子
- 「探討台灣民間信仰」 董芳苑 常民文化出版 1996
- 「日治時期 臺灣都市發展地圖集」 黃武達 国史館・南天書局 合作出版 2006
- 「台灣傳統都市空間之研究」 孫全文・邱肇輝 詹氏書局 1992